

アーカイブズ

ARCHIVES

沖縄県公文書館だより 第10号

平成12年1月25日発行



當山久三一家 1904年（明治37）

後列右から當山久三、妻・ウト、前列左端は姪・良子（松岡政保元琉球政府行政主席夫人）

「移民の父」といわれる當山久三（1868～1910）と家族との記念写真。このとき、久三は37歳。久三のすぐ下の弟又助は1899年（明治32）の第一回移民で、二番目の弟文太郎も1904年（明治37）にハワイへ渡っている。外国にいる弟たちへ送るための記念撮影であろうか。明治期の女性の服装や髪型がうかがえる貴重な写真である。

當山善堂館長就任



とうやまよし たか 館長
當山善堂館長

平成七年八月一日の開館時から館の運営に関わってこられた宮城悦二郎前館長と平成九年から勤務された宮城剛助前資料第一課長が、平成十一年三月三十一日付で退職。また、田里正夫前副館長が平成十一年四月一日付で沖縄県計量検定所長に異動しました。後任の館長に當山善堂、副館長に宮城保、資料第一課長に崎浜秀俊が発令されました。當山館長は八重山支庁長などを経て就任した三代目の館長ですが、専任の常勤初代館長になります。秘書、人事、財政、地域振興等の各分野の行政を経験してきた生粋の行政マンです。新館長に就任からこれまでの感想と今後の抱負を語ってもらいました。

—— 昨年四月一日の就任と同時

に、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会の副会長を、宮城前館長から引き継ぐなど、一般行政の経験しかない私に、はたして専門性を要求される公文書館長が勤まるか、不安な気持ちの船出でした。

幸い、ベテラン揃いの幹部職員、全国に誇れる質量ともに優れた専門職員や嘱託職員に支えられ、また、公共建築百選に顕彰された立派な施設の中で充実した館運営を進めているところで

す。今日、行政に最も強く求められているのは、その透明性、公開性、公平性の具現化であり、これらが担保されてはじめて県民の行政への信頼と参画を確実なものとする事ができると信じています。

平成十二年度は、開館五周年の記念すべき節目を迎えますので、職員ども、歴史の証言者としての古文書等と文字通り熱い心を通わせつつ、県民の奉仕者として優しく、明るく、着実に業務を遂行してまいりたいと考えております。

皆様の変わらぬご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。——

企画展

「公文書館資料にみる 海外移民の軌跡」

平成十一年八月三日から九月十九日まで、公文書館展示室において「公文書館資料にみる海外移民の軌跡」展を開催しました。

西暦二千年は、「移民の父」といわれる當山久三がハワイへ移民を送り出してから百年を迎える記念の年であり、各市町村で先人達の功績を讃える様々な行事が予定され、移民史編纂

事業が行われるなど移民への関心が高まっています。

今回の企画展では、公文書館が所蔵する琉球政府文書を中心に戦前・戦後の沖縄県における移民の歴史を振り返り、特に戦後の政府計画移民を中心に取り上げてみました。中でも、松岡政保元琉球政府行政主席関係資料の中から、顔のあまり知られていなかった當山久三の写真が見つかり、貴重な写真であることが判明しました。

他にも公文書館には移民史研究家である比嘉太郎関係資料、海外協会会長であった稲



出発を待つ移民一行の荷物

移動展

名護

沖縄県公文書館と名護市教育委員会との共催事業として、「記録された名護・やんばる」をテーマに第二回沖縄県公文書館名護移動展を名護市立中央図書館において、平成十一年三月二十日から四月十八日までの三十日間にわたって開催しました。

今回の移動展は昨年の石垣市に次ぐもので、公文書館から遠隔地に在住の県民に公文書館の目的と役割の周知を図るとともに、名護市立中央図書館の開館を記念して開催したものです。

展示内容は当館が米国立公文書館より収集した写真を中心としたものですが、来館者の関心は高く、中でも一九四五年に米軍が空中撮影した名護湾の写真に人気が集まり、現在の様変わりした名護湾と比べて懐かしそうに見入っていました。また、琉球政府時代に高等弁務官資金という制度で各市町村の公民館や道路、下水道工事が行われた際の資金交付式や落成式等の写真もあり、それが米国立公文書館に整理・保存されていることを知り、驚く方もいました。

写真の説明にある地名や人物名に疑

問を投げかける方もあり、その確認のため名護市史編さん室の職員と一緒に新たな情報収集を行い、訂正できたのも多くありました。

今回、図書館友の会の全面的な協力がありましたことに深く感謝します。



展示会の様子
～家族であれこれ談議～

祝辞を述べる比嘉敏雄氏
(名護市教育委員会教育長)

宮古

名護市での移動展に続き、平成十一年十一月二日から二八日までの二七日間にわたって平良市総合博物館において第三回沖縄県公文書館宮古移動展を開催しました。今回の移動展は平良市総合博物館創立十周年記念事業として、「公文書館資料にみる海外移民の軌跡と宮古関係資料」をテーマに当館と平良市教育委員会が共同で開催したものです。

展示内容は八月から九月にかけて開催した企画展「公文書館資料にみる海外移民の軌跡」からの選抜資料と宮古関係資料で構成し、中でも、海外移民資料、琉球国絵図、辞令書に押された宮古群島政府の印影、河村只雄氏の戦前の宮古関係資料、ジョージ・H・カー氏の写真に人気が集まりました。

とくにこれまで見つかっていなかった宮古群島政府の印影については、下地敏彦宮古支庁長が定例記者会見で情報提供を呼びかけたところマスコミに取り上げられ、平良市西里在住の三島貞男氏から辞令書に押された印影があるとの情報をいただきました(詳細トピックス)。

また、河村只雄氏の写真をご覧になった方に写っている場所の特定に協力していただいたり、ジョージ・H・カー氏の写真に写っている子供たち全員の名前も判明しました。



宮古移動展会場

移動展は宮古支庁をはじめ平良市教育委員会やマスコミ各社、地元歴史研究者等大勢の協力で、地元の方々の関心を集め、期間中の入場者数は約二千人を数えました。情報収集にご協力くださった各関係機関の方々に厚くお礼を申し上げます。

資料紹介

こんな資料が 利用できます

1. USCAR文書 (United States Civil Administration of the Ryukyu Islands)

公文書館は、米国立公文書館が収蔵する琉球列島米国民政府(USCAR)の文書(推定で三二十万枚)をはじめ、国務省・国防総省などを出所とする沖縄関係資料を収集しています。USCAR文書については現在、以下の部局の資料を収集し公開しています。今年度は引き続き、高等弁務官室・民政官室・副民政官室・渉外局などの文書を公開していく予定です。

- 公益事業局(Public Works Department)文書 マイクロフィルム八四
- リール
- 民政官府(Civil Affairs Teams)文書 マイクロフィルム十リール
- 文書の来歴等に関する資料(Non-Record Material) マイクロフィルム五リール

国務省一般文書 (General Records of the Department of State)

沖縄の情勢を現地や東京の米国大使館から本国に報告したものがほとんどを占めます。

- セントラルファイル一九四五年～一九六九年 米国立公文書館所蔵 Record Group 59 全一二六フォルダー。資料の年代は一九五〇年～一九七〇年(ただし、ほとんどは六九年まで)



USCAR文書庫
資料は全て中性紙の箱に
保存されています。

オフラハートイ文書

全一六五フォルダー。一九四五年～一九九四年(実質的には七三年までのもの)。国防省陸軍参謀本部文書(Records of the Army Staff, 米国立公文書館所蔵 Record Group 319)の一部で、米軍属だったオフラハートイ(Edward O. Flaherty)氏が沖縄での米国の軍政や

民政の歴史を編纂するために収集した資料です。結局、この歴史書は出版されませんでした。彼が収集した資料の中には、一九六九年から一九七一年頃までの沖縄復帰準備に関連した内部文書を多く含んでいます。

2. 復帰協資料



北緯27度線上の海上集会

一九九七年五月十五日、沖縄県祖国復帰協議会(復帰協)所有の全資料が公文書館に寄贈されました。復帰協は一九六〇年四月二十八日に結成され、復帰運動の主力となった団体です。一九七七年五月十五日の解散後、復帰協の資料は関係者の尽力によって散逸することなく保管されていました。収発文書、その他の文書類、委員会会議録、毎年の運動方針とその総括資料、闘争課題ごとの資料、東京地裁への違憲訴訟関係資料、復帰闘争史などの書籍、会計帳簿類、写真資料、ポスター・鉢巻き・公印などの印鑑類などがありま

す。そのうち、文書類・パンフレット・書籍など約一千点について、コンピュータで検索し、閲覧が可能になりました。

3. 琉球政府刊行物

琉球政府は一九五二年に発足し、一九七二年の施政権返還まで沖縄の自治を支えた行政組織です。その琉球政府が発行した刊行物のうち、公文書館が所蔵する約四千六百点を、コンピュータで検索できるよう整理しました。立法院・琉球警察・琉球裁判所のものも含まれています。

4. 公文書館収集地図シリーズ1 ～岸秋正文庫所収地図より～

沖縄関係資料の収集で著名な故岸秋正氏の資料約一万一千点が、一九九七年一月、夫人である沖縄出身の料理研究家・岸朝子氏から公文書館に寄贈されました。氏の収集した資料は江戸期から平成までを網羅し、その種類も公文書・古文書・浮世絵・地図・書籍からパンフレット・新聞切り抜きに至るまで、バラエティに富んでいます。この程、地図六三三のマイクロ撮影が終了し、うち五十点はカラーマイクロでも閲覧できるようになりました。一九世紀半ばから戦後まで、地図に記された沖縄の姿を見てくださいませんか？

利用者の声



宮里政玄氏

私は、本土の大学で教鞭をとっていたが、定年を迎えて十七年ぶりに沖縄に帰郷した。帰郷したのは、主に私が三十年も前に書いた『アメリカの沖縄統治』（岩波書店）を改訂するためであった。本土では専門の日米関係、とくに貿易摩擦の問題の研究をせざるを得ず、沖縄問題を研究する暇がなかった。定年後の余生を三十年あまりも放置していた本の改訂に費やそうと考えたのである。

あと一つ、沖縄に帰ったのは、沖縄県公文書館が米国の沖縄統治や沖縄返還交渉について新しい資料を収集していると聞いたからであった。私は定年後にはワシントンに一年ほど滞在して資料を収集するつもりでいた。そのため、夫婦で一年間は米国で生活できる資金を少しずつ貯めていた。資料が沖縄で入手できれば、わざわざ米国まで行く必要はなくなるわけである。帰郷してから公文書館を訪ねてみる

と、私が欲しい資料のほとんどが収集されていることが分かった。具体的に言えば、日米の研究者が情報公開法に従って収集した、一九六〇年以後の国家安全保障関係の文書 (National Security Archives)、国務省沖縄関係文書 (これは一九四五年以来のものすべて)、さらに、陸軍省で沖縄の統治に関する本を書くつもりで資料を集めた「オフラハーティ文書」である。それ以外にも、米国民政府の文書 (高等弁務官室、渉外局の文書) がある。いずれも、研究者ならばノドから手がでるような貴重な文書である。

私には「オフラハーティ文書」には、いささか苦しい思い出がある。一九七二年復帰前に陸軍省の戦史室にかけあつて、この文書の複写を要請したところ、快く応じてくれた。私には資金がなかったため、東京の国会図書館に頼んで複写してもらい、その一部を私がもらうという約束を取り付けた。しかし、このことが駐米日本大使館の知るところとなり、秘密保持を理由に、陸軍省の戦史室に圧力を加えたようである。ある日、戦史室を訪ねてみると、国防省が反対しているため、残念ながら複写はできないということであった。私が本土の大学に移ることを決意したのは、こうした状況では、当分は沖縄関係の資料は解禁されなだらうと考え

たからであった。上に挙げた資料を手にした時、私は、ふとワシントンでの暗い読書室を思い出した。現在では米国の公文書館も新しくなり、施設も立派だと聞いているが、私が通っていたころの公文書館は、古びた、陰気なところであった。今こうして、ワシントンでしか入手できなかった資料が、沖縄で読むことができる。しかも、新しい、見晴らしのいい部屋でゆっくり時間をかけて資料が読める。ワシントンでは、滞在費がかかることから、そこそ大急ぎで文書を読まなければならなかった。ここでは、疲れば何時でも家に帰って休むことができる。それは素晴らしいことである。

ただ問題なのは、複写の費用である。一枚二十円は、いかにも高い。私は一日に三百枚から五百枚も複写をお願いしたから、毎日一万円を払うことになった。これは、とくに私のような「年金生活者」にはこたえる。しかし、これも、ワシントンまで行って資料を収集するよりは、はるかに安上がりである。しかも、有能な職員が手際よくコピーしてくれる。ただ、残念なのは、折角の資料があるというの

に、利用者が少ないようにみえることである。宝の持ち腐れはよくない。多くの人が利用されることを望みたい。(元琉球大学教授、沖縄対外問題研究会会長)



「オフラハーティ文書」

催しもの報告

第二回資料保存講演会

「県内における資料保存の現状と課題を考える」

昨年三月の資料保存講演会では、国立国文学研究資料館史料館より助手の青木睦氏をお招きして、「資料を保存するためにはまず何から取り組めばよいか」という内容でお話していただきました。

青木氏は、例えば着物を年に一回虫干ししたり畳の裏表を返すように、大切な記録資料を守るには「目通し・風通し」、すなわち、日頃から資料をよく気遣うことが重要だと訴えられました。

その後のパネル・ディスカッションでは、具志川市史編さん室長の上江洲敏夫氏と当館参与のアントニー・P・ジェンキンス氏に加わっていただき、会場の参加者とともに県内の資料保存の現状や課題についての意見交換を行いました。会場からは酸性紙資料の劣化の問題や収集した写真資料にカビがはえてしまった例など、具体的な悩み等も聞かれました。一方、パネリストの先生方からまず手始めに心がけてほしい点など幾つかの解決策を紹介して



青木睦氏の講演会

もらい、参加者の関心を集めていました。

この講演会では、事前に県内の図書館や公文書館、博物館等の資料保存機関にアンケートを行い、その集計結果も交えて県内の実状や課題を話し合うことができました。また、終了後も参加者からたくさん意見や希望を寄せられました。これらについては別の機会にぜひ紹介したいと思います。なお、今年度も来る二月十八日に資料保存講演会を予定しています。今回は、酸性紙の検査方法や脱酸処理等についてご紹介するよう企画しています。ぜひ、皆さんのご参加をお待ちします。

公文書館歴史講座

公文書館では企画展「公文書館資料にみる海外移民の軌跡」開催期間中に移民に関する歴史講座を開催しました。戦前における沖縄の移民統計に関する歴史的な話や現在世界に広がるウチナーンチュのネット・ワーク、或いは最も研究が難しいといわれる南洋移民についての話など、移民の過去と現在について移民史研究で実績のある先生方に沖縄社会と移民の関係を語っていただきました。展示した資料と併せて聞くと一層実感のもてる講座でした。

第一回 八月四日

「沖縄県と海外移民百年」

講師 石川友紀琉球大学教授

第二回 八月十一日

「海外ウチナーンチュ社会の現状」

講師 前原信一沖縄テレビ報道局次長・キャスター室長

第三回 八月十八日

「南洋移民の点景・点描」

講師 赤嶺秀光

(株)工人代表取締役

映画会

公文書館では、「映像資料で見る沖縄現代史」というシリーズで七月から十二月まで毎月第三金曜日午後六時三十分から映画会を開催しました。毎回、約四十〜七十名の参加者でした。

第一回 海—その望ましい未来—、海の祭典（沖縄海洋博関係映画）

一九七五年製作

解説・伊佐次郎氏（沖縄近海鮪漁業組合顧問）

第二回 起ちあがる琉球（琉球列島米国民政府一九七〇年製作、沖縄の海外移民関係映画）

解説・島袋伸三氏（琉球大学教授）



『起ちあがる琉球』より

イギリスの公文書館探訪

昨年七月から九月にかけて、当館修復士・大湾ゆかりが人材育成財団の国外研究員派遣プログラムでイギリスの公文書館で研修を受けました。今回、彼女にイギリスの国立公文書館を紹介してもらいます。

英国国立公文書館

Public Record Office

ロンドン郊外、キューガーデン駅から色とりどりの草花に包まれた家並みを抜けると、突然近代的な建物が目の前に現れます。先ごろ都心部から全面的に移転してきた新しい英国国立公文書館（略称P R O）です。

七月の末、私はこのコンサバーション（資料保存）課に数日間通い、課長のマリオ・アレポ氏をはじめコンサバーターの皆さんに、館の案内や修復技術をご指導いただきました。

同課では、三十余名の常勤職員が文書、写真、地図・図面、シール・展示、製本等の係に分かれて作業しています。そのうち、ルースさんとケイトさんの女性二人が率いる文書係では、主に手作業やリーフキヤスティングマシンを使って十七世紀以前の資料を修復しています。中でも針を使った手修復は、細かい紙片をつなぎ合わせ、欠損部分を埋めて補強用に薄葉紙を貼り合わせ

る非常に緻密な作業です。大変神経を使う仕事ですが、そこはさすがに慣れた手つき。作業中も和やかな話し声が絶えないほど余裕と明るさに満ちた雰囲気印象的でした。



文書係のコンサバーター
右からケイトさん、マイケルさん、ルースさん、ジョンさん

P R Oでは、施設の規模やシステム化された運営、そして何よりも閲覧者の数に驚かされました。まず、八つの書庫はさながら工場の倉庫のように広く、その中で数十名の職員が電動カートに乗って資料を出納しています。資料は書庫からエレベーターやトロッコに乗せられて自動的に閲覧室へ。閲覧室では、広い室内もほぼ満席状態なのに、資料の受け渡しや返却が整然と行われています。近年、P R Oでは大勢の利用者の要望に的確に答えられるよう、利用面での運営方法をとくに工夫しているそうです。改めて公文書館のあるべき姿を見た気がしたと同時に参考にした事柄をたくさん発見できた数日間でした。（修復士・大湾ゆかり）

第二五回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会

第二五回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）全国大会が去る平成十一年十月二十七日から二十九まで、新潟市で開催されました。「地域史料の充実をめざして―新潟からの提唱―」をテーマに、全国の公文書館、自治体史編集機関、図書館などから総勢三二六名が北陸地方初めての大会に参加、三日間の研修中、さまざまな情報の収集や意見の交換を重ねました。

地域史料保存に関する取り組みの事例、地域と公文書館のつながり、また公文書館の管理や情報公開制度に関する報告が発表され、活発な質疑応答がなされました。当館からは同協議会副会長を勤める當山館長をはじめ、六人の職員が参加しました。また、当館修復士の大湾ゆかりが「資料保存と修復計画の立案」と題して発表。資料保存に関わる基本的問題を提起しました。

さらに、今回特別に元イギリス国立公文書館長マイケル・ローバー氏の「近時におけるアーカイブズの国際的動向と任務」と題した講演会に参加できる機会もあり、多様で有意義な大会となりました。次回は今年十月、大分県で開催予定です。

第三回 沖縄からの手紙、豊かな太陽（復帰前後の沖縄観光P R 映画）
解説・小濱哲氏（名桜大学教授）

第四回 沖縄の生産業・鉄鋼業・拓南製鐵株式会社（琉球列島米国民政府が製作した沖縄の基幹産業十三企業の記録映画）
解説・古波津清昇氏（拓南製鐵株式会社代表取締役会長）

第五回 沖縄の祭り、ウングミ―塩屋湾―（沖縄の祭りの記録映画）
解説・津波高志氏（琉球大学教授）

第六回 琉球の風物、琉球の民藝（柳宗悦監修一九三八年製作）、体育行脚 沖縄の巻、八重山群島の巻（戦前の沖縄の記録映画）一九二九年製作
解説・真栄平房敬氏（首里城復元期成会副会長）



『体育行脚』 沖縄の巻より
～泊の塩田風景～

